

国際高生 地歴甲子園優秀賞

3年沢田さん 安政地震の津波石碑調査



地歴甲子園で優秀賞に輝いた沢田千代子さん。
協力してくれた水津竜也教諭と受賞を喜んだ
(高知市鴨部2丁目の高知国際高)

高校生が地域の歴史や文化などについて探究する「地歴甲子園」で、高知国際高校3年の沢田千代子さん(18)が最上位の優秀賞に輝いた。1885年に起きた安政南海地震の津波被害を記した石碑「萩谷名号碑」(土佐市宇佐町)について調べ、その内容が信用に値するとまとめた。「石碑は、地震の後には津波が来るという先人からのメッセージ。しっかりと受け止めて、次の時代に語り継いでいきたい」と話している。

「次の時代に語り継いでいきたい」

地歴甲子園は奈良大学が主催。個人かグループで応募した最大8千字のリポートを、同大学長らが審査する。19回目の今回は全国から86編の応募があり、沢田さんは優秀賞5編の一つに選ばれた。

タイトルは「安政南海地震後に建てられた萩谷名号碑の碑文は、どれだけ信用性があるか」。

碑は地震の4年後、お遍路さんも通る道沿いに建立された。津波が8、9度押し寄せたことや、衣食も持たず山に避難した人は助かったことなどが刻まれており、急いで避難することの大事さを伝えている。

沢田さんは、その内容が正確か、地元の住職が書き残した「真覚寺日記」と比較。日記にも津波が何度も来たことや、「金銀雑具に目を懸け油断せし者は悉く溺死す」とあったことなどに着目。表現は異なるものの、同じことを伝えているとして、碑文が「十分に信用できる」と結論づけた。

また、昭和南海地震(1946年)の被災者の聞き書き資料に当たり、複数の被災者が「山へ逃げよ」の意識を持つて助かっていたことから、「碑文の教訓が十分共有されていたと推測できる」とした。

沢田さんはグローバル科デ

イプロマ・プログラム(DP)コースの生徒で、防災の大切さを呼びかける学内団体に所属。今回、卒業論文を兼ねて、地震関連のテーマで応募した。国土地理院が2019年に新たな地図記号の「自然災害伝承碑」を作ったと知り、碑に焦点を当てた。オーディア高知図書館に2週間ほどもって資料をあさった。

受賞に「やったー、奈良に行ける」と喜んだという沢田さん。11月末に同大学で発表を行った。生徒会長を務めた経験などから「人前に立つのは苦じゃない」。審査員からは「歴史的視座から文献と証言を活用した考察は興味深い。防災という今日的問題に着目し、時宜を得たテーマ」と評価され、学長にも「迫力のある発表だった」と褒められた。

沢田さんは「全国には風水害の碑文も多く残されている。読み解いて信用性を確かめれば、昔の人の知恵を生かせる。ハザードマップに反映すると、より多くの人の命を助けられる」。横浜市立大学への進学が決まっており、「水害や台風災害に強い都市づくりを携わりたい」と夢を語った。

(加治屋隆文)